



Title	吐魯番出土文物研究会会報 第35号 : 特集・吐魯番の歴史と文化Ⅱ
Author(s)	
Citation	吐魯番出土文物研究会会報. 1990, 35, p. 1-6
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78845
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈翻 訳〉

吐魯番の歴史と文化(Ⅱ)

榮新江 著

青木 茂・關尾史郎訳註

◆高昌郡

三一七年、西晋は滅亡した。涼州は張氏政権が割拠するところとなったが、なお西晋の建興という元号が用いられていた⁽¹⁾。建興一五(東晋咸和二/三二七)年、叛將の戊己校尉趙貞を捕えて高昌を占拠した張駿は、初めてこの地に高昌郡を設置し、その下に高昌、田地の二県を管轄した⁽²⁾。これにより戊己校尉は形骸化し、吐魯番盆地の東部は屯田の開発区域から発展して一つの郡となったが、涼州の地方政権に属するようになったため、高昌の命運も、河西の地方政権の興亡に左右されることになった⁽³⁾。

前凉による高昌の統治は五〇年余にわたって続けられた。この前凉は三七六年、前秦の苻堅に涼州の姑臧城を陥れられて滅びた。苻堅は梁熙を涼州刺史に、また高昌の楊幹(一に翰に作る)を高昌太守に任命した。高昌郡はここに長安に都する前秦に帰属することとなったが、実質上は涼州刺史の指揮下にあった。三八四年、淝水の戦いに破れた前秦は、鮮卑の慕容垂、慕容冲、および羌族の姚萇などの勢力によって崩壊した。三八五年、苻堅の命を奉じて龜茲に遠征していた將軍の呂光が姑臧に入り、後凉王朝を建てた⁽⁴⁾。高昌郡の支配権は後凉の手に移ったのである。この地が西辺の要地と判断した呂光は三九四年、とくにその子呂覆を西域大都護に任じて高昌に鎮守させた。しかしほどなくして三九七年には、建康(現在の酒泉西南)太守の段業が涼州牧・建康公を自称し、神璽と改元して高昌を占拠した。吐魯番出土文物のなかにも神璽三(三九九)年の「正法華經・光世音品」⁽⁵⁾と「倉曹貸糧文書」⁽⁶⁾があり、この史実を補完している。さらに翌年には、敦煌太守の李嵩が凉公を自称し、庚子と改元して、西凉政権を建てた。その直後今度は盧水胡の沮渠蒙遜が段業を殺し、張掖を占拠して永安という元号を定めた。これが北凉である。一方、姑臧にあった後凉は後秦に滅ぼされてしまった。この時期、高昌は一貫して西凉の支配下にあったが、四二一年、北凉の沮渠蒙遜が西凉を攻め滅ぼしたので、高昌は北凉の支配を受けることとなった。北凉は玄始一二、一三(四二四、四二五)年、夏の赫連勃勃に臣従したので、この間は吐魯番一帯でも夏の真興という元号が用いられた⁽⁷⁾。四三五年になると、柔然の後援のもとに關爽が自立して高昌太守を称し、北凉の支配を離脱するに至った。これより、河西地方から独立する傾向が高昌郡に生まれたのである⁽⁸⁾。四三九年、都の姑臧を包囲された沮渠牧犍は北魏に降った。北凉の残党は牧犍の弟である酒泉太守の沮渠無諱に率いられて、西方の鄯善に拠った。四四二年にはまた北上して關爽を攻撃し、柔然に奔走した關爽にかわって、無諱が高昌を占拠することになった。彼はその翌年承平と改元して、凉王を号し、高昌に独立した地方王国をうち建てた⁽⁹⁾。ここに高昌郡の時代は終わりを告げたのである。

高昌は中原から遠く離れた西辺に位置していたが、河西の各地方政権に所属する一つの郡となったため、行政制度の面はもとより、軍事施設の面においても、漢・魏以来中原で行なわれていた官制と基本的には同じであった⁽¹⁰⁾。そのほか、かつての戊己校尉時代の影響として、この地では兵戸と民戸に厳格な区分がなく、召募と謫発によって集められた高昌郡の兵士は国境、道路、および水路など

の防衛・管理に従事していた⁽¹¹⁾。

◆仏教の初伝

高昌郡は、戊己校尉が漢の軍隊を率いて屯田を行なった基礎の上に発展してきたものであり、諸涼王朝の統治下に入ってから、河西の地方色豊かな漢・魏文化がこの地に続々ともたらされた。阿斯塔那古墓中から出土した北凉時期の『毛詩関雎序』⁽¹²⁾は、儒教文化がこの地に伝播したことを表わしている。漢文化の高昌郡に対する影響は深化・拡大していったが、これは西方伝来の仏教とて例外ではなかった。

日本の大谷探検隊が吐峪溝で発見した『諸仏要集経』の写本⁽¹³⁾は、現在確認できる最古の吐魯番出土の仏典であるが、この写本の末尾にある題記には以下のようにある。

元康二年正月廿二日、月支菩薩法護、手執

困、□授曇承遠和上、弟子沙門竺法首筆

□。□令此経、布流十方、戴佩弘化、速成□□。

元康六年三月十八日寫記。

凡三百十二章、合一萬九千五百九十六字。

ここから、これが当時著名な訳経僧であった竺法護が西晋の恵帝元康二（二九二）年に訳出した經典で、訳出した場所は洛陽城だったことがわかる。この元康六（二九六）年の抄本は、その後まもなく中原もしくは河西から高昌へ伝えられたもので、法護が漢訳した大乘經典の吐魯番地区に対する影響を物語っている。高昌郡の設立後、漢訳仏典は日増しに増加し、現在でもなお見ることができる写経の残巻や断片には以下のようなものがある。前秦甘露二（三六〇）年に沙門静志の写した『維摩経義記』卷二（吐峪溝出土）⁽¹⁴⁾、後凉麟嘉五（三九三）年に王相高が写した『維摩詰経』（上海博物館所蔵）⁽¹⁵⁾、北凉神璽三（三九九）年に道人宝賢が写した『仏名経』⁽¹⁶⁾、同年張施が写した『正法華経』光世音品⁽¹⁷⁾、北凉承玄二（四二九）年己巳歳に令狐炭が賢者董畢狗のために写した『妙法蓮華経』方便品（吐峪溝出土）⁽¹⁸⁾、承玄三（四三〇）年庚午歳に写された『金光明経』卷二（安楽城出土）⁽¹⁹⁾、北凉縁禾三（四三四）年に比丘法融が供養した『大方等無想大雲経』⁽²⁰⁾、および『優婆塞戒経』卷六、七など⁽²¹⁾。これらの漢訳仏典の伝播と筆写は、大乘仏教がこの地において盛行していたことの反映である。また仏教文献からは、当時の高昌郡においては訳経の供養だけではなく、高僧たちによって訳経が組織的になされていたことがわかる。『出三蔵記集』卷二には、「方等檀持陀羅尼経」四卷、晋安帝年間（三九七～四一八年）、高昌郡の沙門釈法衆によって訳出された⁽²²⁾とある。同書にはまた、北凉王沮渠蒙遜の従弟で安陽侯の沮渠京声がかつて高昌国において『観弥勒菩薩上升兜率天経』と『観世音観経』各一卷を得て、高昌郡において漢文に訳出したことが述べられている⁽²³⁾。

吐魯番盆地はシルクロードの幹線上に位置していたので、漢訳仏典が伝播・訳出されたばかりでなく、インドや西域のその他の国々から伝来したサンスクリットの仏典が盆地内の車師前部や高昌郡で流布していた。『出三蔵記集』卷八には、前秦の建元一八（三八二）年に、車師前部王の国師鳩摩羅跋提がサンスクリットの『大品般若経』を苻堅に献上したことが記されているし⁽²⁴⁾、また同書の卷九には、サンスクリットの『四阿含経』も車師前部で流布していたことが述べられている⁽²⁵⁾。さらに同書の卷八には、釈智猛が甲子歳（四二四年）に天竺（インド）から高昌へ『大涅槃経』の胡本をもたらし、河西王沮渠蒙遜が高昌に使者を派遣してこの胡本を取り寄せ、曇無讖にこれを訳出させたことを伝えている⁽²⁶⁾。今世紀初頭、プロシアの探検隊が吐魯番の交河故城、高昌故城、および勝金口などで大量のサンスクリットの写本を発見したが、そのなかには『相應阿含』、『比丘尼戒本』、『法集頌』、『俱舍論本頌』、『大般涅槃経』、および『妙法蓮華経』などが含まれていた⁽²⁷⁾。このうちわずかな大乘經典を別にすると、多くは説一切有部に属する経論であって、小乗仏教がこの地で盛行していたことがわかる。また仏教思想の伝播にともない、仏教の造像芸術もこの頃から勃興しはじめた。ベルリンに持ち去られた北凉の宋慶とその妻張氏の仏塔は、酒泉や敦煌から出土した北凉

の仏塔と同じ形式のものであり、塔上部には仏像と『仏説十二因縁経』の経文が刻されている⁽²⁸⁾。吐峪溝の石窟（唐代には丁谷寺と呼ばれた）もこの時期に第一期の石窟が開鑿されている⁽²⁹⁾。この内部に安置された仏像は、仏塔と同じように、主として小乗の禪法が盛行していたことを示している。

しかしながら高昌郡時代の仏教の盛行には一定の限界もあった。私たちが阿斯塔那や哈拉和卓の高昌郡時代の墓葬を観るとき、仏教に関連する痕跡を眼にすることはまずない。例えば死者の姓名や本籍、死亡した年月日を記した『随葬衣物疏』には、ただ「左青龍、右白虎、前朱雀、後玄武」といった道教的な色彩をもった語句があるだけで、麹氏高昌国時代の『随葬衣物疏』にあるような「大徳比尼」とか「仏弟子」といったような称呼はたえて見られない⁽³⁰⁾。このことは、社会風俗の面において、この地にあった漢族の官吏や士人たちがなお中原の漢文化の強烈な影響と支配を受けていたことを表わしている。

◆『涼王大沮渠安周功德碑』

五世紀中葉の吐魯番盆地には、二つの大きなできごとがあった。一つ目は、北涼の殘党がこの地で独立して王を称したこと⁽³¹⁾、二つ目は、車師前王国が滅亡し、それによって、盆地が遂に統一されたことである。

四四二年、北涼王沮渠牧犍の弟沮渠無諱が鄯善から焉耆を経て東方の高昌に進入してきた。高昌太守の闕爽はその進入を拒んだが、九月に入ると無諱は將軍衛興奴を派遣して降伏するように見せかけておいて、高昌に夜襲をかけた。敗れた闕爽は柔然に奔走した。そこで沮渠無諱はついに高昌を占拠し、南朝の宋に上表文を奉った。翌四四三年には、無諱は承平と改元して、涼王と称した。高昌郡の基礎の上に、はじめて河西の地方政権からの独立が達成されたのである。承平二年の夏、無諱が死ぬと、弟の沮渠安周が即位した。安周は交河城にあった車師前部に対する攻撃の手をゆるめず、ついに承平八（四五〇）年には柔然の助けを借りて交河城を攻め落とした。車師王の車伊洛父子は焉耆を経て東方に向かい、平城に入ったので、ここに車師国は滅び、沮渠氏の大涼政権によって吐魯番盆地全域の統一が実現したのである。これより、高昌回鶻王国の滅亡によって多くの区域⁽³²⁾に分裂するまでの間、吐魯番盆地は一貫してひとつの政治勢力として発展の一途をたどるのである。

沮渠安周は在位していた一六年の間、南方の宋と連係して、東方の北魏に対抗した。当時北魏では内部抗争が激化していたので、滅んだ車師の君主一族を適切に処置しただけで、それ以上に西進して北涼の殘党を全滅させるだけの余力はなかった。そのため安周は辺境の一隅に落ち着くことができたのだが、ほどなくして承平一八（四六〇）年には、北方の強大勢力柔然のために滅ぼされてしまった。沮渠安周を倒した柔然は闕伯周を王に擁立した。

北涼の王族が高昌に進入・占拠したことによって、吐魯番地区の文化は発展を遂げるようになった。例えば、当地で盛行していた仏教の場合、承平三（四四五）年に建立された『涼王大沮渠安周功德碑』がある⁽³³⁾。これは中書郎中夏侯粲が撰者となり、法師の法鑑と典作御史の索寧の監督のもとに造られたものである。碑文の作者は内外の典籍に精通しており、その文章は熟達・典雅をきわめていて、当地の文化水準の高さを示している。碑を建立した功德主については、そのなかに次のように書かれている。

涼王大沮渠安周、誕妙識於靈府、味純猷而獨咏。雖統天理物、日日万機、而諛譏之心、不忘造次□□、□□之寄逆旅、猶飛軒之佇唐肆。罪福之報行業、若影響之應形聲。一念之善、成菩提之果、瞬息之惡、嬰累劫之苦。

碑は本来高昌城の中央に立っていた。すなわち現在の「可汗堡」の傍らにある寺院址の東南の角にあったが、現在我々がここに行って原碑を参観しようと思っても、もはやそれは不可能である。なぜならば、一九〇二年の冬、この碑はここへ来たドイツ人考古学者のアルベルト・グリュンヴェーデル（Albert Grunwedel）によってベルリンに運び去られ、その民族学博物館に納められたあげく、第二次

世界大戦末期にベルリンを襲った戦火によって破壊されてしまったからである。現在私たちは、搬出直後に公表された写真によってこの碑を観ることができるにすぎない。なお一九〇五年にヨーロッパへ視察に出かけた憲政の端方が持ち帰った碑全体の拓本は、北京の中国歴史博物館に収蔵されている。

吐峪溝などから出土した写本は、沮渠安周が功德のために碑を建立しただけでなく、また数多くの写経を供養したことを私たちに教えてくれる。東京の書道博物館には、『持世経』持世第一が所蔵されているが⁽³⁴⁾、これは己丑歳（四四九年）に、南方からやって来た「呉の客、丹楊郡の張休祖が写し」たものである。また承平一五（四五七）年に書吏の樊海が書写した『仏説菩薩藏經』巻一⁽³⁵⁾、『十住毗婆沙論』巻七⁽³⁶⁾と『仏華嚴經』巻二八⁽³⁷⁾などもある。我々の注意を引くのは、この四種の經典中、先の三点は鳩摩羅什によって五世紀初頭に新たに訳出されたものであり、最後の一点は仏陀跋多羅（覺賢）が四二一年に建康（現在の南京）において訳出を完了したものであるという事実である。すなわちこれら遠く離れた長安や建康において新たに訳出された經典が、数十年の間に高昌に伝えられ、涼王大沮渠安周の供養経となったのである。このことは、沮渠安周が吐魯番における仏教の発展に寄与したことを如実に示している。

仏教の石刻や写本以外には、一九七二年に新疆の考古研究者が阿斯塔那一七七号墓から発掘した石製の墓表がある⁽³⁸⁾。録文は以下の通りである⁽³⁹⁾。

大涼承平十三年歲
在乙未四月廿四日、
冠軍將軍・涼都高昌
太守・都郎中大旦渠
封戴府君之墓表也。

墓表の形式と書法の作風から判断して、明らかに中原地域の喪葬習俗が反映されており、墓表の形式はこれ以後、高昌地区においても発展するのであって、これは、沮渠氏の高昌への進入・占拠がもたらした社会風俗上の変化といわざるをえない。

【訳 註】

- (1) 建興なる元号の終末については、關尾「前涼「升平」始終－『吐魯番出土文書』割記（二）－」（『集刊東洋学』第五三号、一九八五年）、参照。
- (2) 高昌郡の設置については周知のように、『輿地志』（『初學記』巻八隴右道、『太平寰宇記』巻一五六隴右道、所引）に、「晉咸和二年、置高昌郡、立田地縣」とのみあって、高昌県については記すところがない。しかし「西涼建初十四（四一八）年八月韓渠妻随葬衣物疏」（『文書』Ⅰ、一四～一五頁）などの記載から、高昌郡時代には、麹氏高昌国の時代とは異なり、高昌県が設置されていたことが確認される。
- (3) 河西政権と高昌の関係に関わる最近の成果としては、齊陳駿・陸慶豊・郭鋒『五涼史話』（蘭州 甘肅人民出版社・西北史研究叢書、一九八八年）、町田隆吉『シルクロードの謎』（光文社・光文社文庫、一九八九年）などがある。
- (4) 涼州をめぐる梁熙と呂光の対立・抗争については、關尾「「白雀」臆説－『吐魯番出土文書』補遺－」（『上智史学』第三二号、一九八七年）、参照。
- (5) 「識語」Ⅰ、三頁。
- (6) 『文書』Ⅰ、三二頁。
- (7) 北涼、夏兩政権の交渉については、關尾「北涼政権と「真興」奉用－『吐魯番出土文書』割記（一）－」（『東洋史苑』第二一号、一九八二年）、参照。
- (8) 關爽政権の性格については、白須淨眞「高昌・關爽政権と縁禾・建平紀年文書」（『東洋史研究』第四五巻第一号、一九八六年）、關尾「「建平」の結末－『吐魯番出土文書』割記（

- 四) -」(『新瀉史学』第一九号、一九八六年)、参照。
- (9) 沮渠氏の政権については、「墓埵考釈」Ⅱ、参照。
- (10) 高昌郡の行政制度と軍事施設については、それぞれ唐長孺「吐魯番文書中所見高昌郡県行政制度」、同氏「吐魯番文書中所見高昌郡軍事制度」(いずれも、同氏『山居存稿』北京 中華書局、一九八九年、所収)、参照。また高昌郡における軍制と兵制の特質を論じた成果として、嚴耀中「吐魯番文書中所見高昌郡兵民和軍政關係初探」(敦煌文物研究所編『一九八三年全國敦煌學術討論會文集』文史・遺書編上冊、蘭州 甘肅人民出版社、一九八七年〈本誌第一二号、一九八九年、参照〉)がある。
- (11) 治水灌漑に対する兵士の関与については、町田隆吉「五世紀吐魯番盆地における灌漑をめぐる吐魯番出土文書の初歩的考察」(中国水利史研究会編『佐藤博士退官記念中国水利史論叢』国書刊行会、一九八四年)、柳洪亮「十六国時期高昌郡水利考」(『新疆社会科学』一九八五年第二期)、参照。
- (12) 『文書』Ⅰ、五七頁。
- (13) 「識語」Ⅰ、二頁。栄氏の録文はこの池田氏のものと異なるが、いま改行箇所のみを本来のかたちにあらため、それ以外の点は栄氏の原著のままとした。
- (14) 「識語」Ⅰ、三頁。
- (15) 「識語」Ⅰ、三頁。
- (16) 「識語」Ⅰ、三頁。
- (17) 註(5)、参照。
- (18) 「識語」Ⅰ、五頁。
- (19) 「識語」Ⅰ、五頁。『新博』、図版八四(解説は一九八頁)に写真がある。
- (20) 「識語」Ⅰ、五頁。
- (21) 「識語」Ⅱ、三～四頁。なお「丁卯歲」について、「識語」は四二七年に比定している。
- (22) 『出三蔵記集』卷二新集撰出經律論録第一。
- (23) 『出三蔵記集』卷二新集撰出經律論録第一には、「觀彌勒菩薩上生兜率天經一卷・觀世音觀經・禪要秘密治病經二卷・仏母般泥洹經一卷。右四部凡五卷、宋孝武帝時、僞河西王從弟沮渠安陽侯於京都譯出。前二觀、先在高昌郡、久已譯出於彼、賁來京都」とある。
- (24) 『出三蔵記集』卷九大品經序第二に、「鳩摩羅什法師慧心夙悟、……秦王感其來儀、時運開其凝滯、以弘始三年歲次星紀冬十二月二十日、至長安。秦王扣其虛闕、匠伯陶其淵致、……以弘始五年歲在癸卯四月二十三日、於京城之北逍遙園中、出此經。法師手執梵本、口宣秦言。……以其年十二月十五日出、尽校正檢括、明年四月二十三日、乃訖」とある。卷数と内容が若干異なるが、栄氏の挙例はこのことと思われる。
- (25) 『出三蔵記集』卷一〇四阿含暮抄序第一〇に、「有外國沙門字因提麗、先賁詣前部國、秘之、佩身、不以示人。其王彌第求得諷之。……遂得布此、餘以壬午之歲八月、東省先師寺廟於鄴寺、令鳩摩羅佛提執梵文、佛念・佛護爲譯、僧導・曇究・僧叙筆受、至冬十一月、乃訖。此歲夏出阿毗曇、冬出此經」とあり、栄氏の挙例と卷数が異なる。
- (26) 『出三蔵記集』卷九大涅槃經記第十七に、「其梵本、是東方道人智猛從天竺將來、暫憩高昌。……河西王……遣使高昌、取此梵本、命譯譯出」とあり、また同卷九大涅槃經序第十六には、「天竺沙門曇無讖者、中天竺人、婆羅門種。……先至燉煌、停止數載。大沮渠河西王者、至德潛著、建隆王業、……讖既達此、以玄始十年歲次大梁十月二十三日、河西王勸請令譯、讖手執梵文、口宣秦言」とある。これも栄氏の挙例と卷数が異なる。
- (27) プロシア隊将来のサンスクリット写本については、E. Waldschmidt, *Sanskrit handschriften aus des Turfanfunden, Teil I* ~ (Wiesbaden, 1965~. 現在第六卷まで公刊されているが、第

四巻より編者・発行地が変更).があることを、荒川正晴氏ほかからご教示いただいたが、同定作業は未了である。

- (28) Albert von Lecoq, Chotshho (Berlin, 1913), tafel 60. なお酒泉出土の仏塔については、關尾「酒泉出土五世紀仏塔刻銘集成-附、西安収集四世紀金錯泥甬刻銘-」(本誌第三号、一九九〇年)を、また敦煌出土の仏塔については、王毅「北凉石塔」(『文物資料叢刊』第一輯、一九七七年)を、それぞれ参照。
- (29) 『新疆考古』、五八〇～五八一頁、『考古発現』、五四二頁、「普查資料」、五九～六一頁、参照。また吐峪溝石窟の近況を伝えるものに、白須淨眞「崩れゆく第一級資料-初公開の新疆・仏教遺跡を訪ねて-」(『朝日新聞』一九八七年一〇月三日〈八版〉)がある。
- (30) 吐魯番出土の随葬衣物疏とその変遷については、白須淨眞「随葬衣物疏付加文言(死人移書)の書式とその源流-吐魯番盆地古墳群出土の随葬衣物疏の研究(一)-」(『仏教史学研究』第二五巻第二号、一九八三年)、小田義久「吐魯番出土葬送儀礼関係文書の一考察-随葬衣物疏から功德疏へ-」(『東洋史苑』第三〇・三一号、一九八八年)、参照。
- (31) 註(9)、参照。
- (32) 原文は「地面」。この表現は、馮家昇・程溯洛・穆廣文編『維吾爾族史料簡編』(上冊)(北京 民族出版社、一九五八年〈再版、一九八一年〉、第九章)にも見える。
- (33) 当碑全体の録文とその研究史については、池田温「高昌三碑略考」(『三上次男博士喜寿記念論文集』歴史編 平凡社、一九八五年)、蔣文光「孤本《北凉沮渠安周造佛寺碑》研究」(『新疆文物』一九八九年第二期)、参照。なお栄氏の録文は一部これらと異なるところがあるが、ここでは原著を上げておく。
- (34) 「識語」I、五頁。
- (35) 「識語」I、六頁。
- (36) 「識語」I、七頁。
- (37) 「識語」I、七頁。
- (38) この墓表の意義については、「墓塼考釈」II、周偉洲「試論吐魯番阿斯塔那沮渠封戴墓出土文物」(『考古与文物』一九八〇年第一期)、および侯燦「大凉沮渠封戴墓表考釈」(黄盛璋編『垂洲文明論叢』成都 四川人民出版社、一九八六年)、参照。
- (39) 栄氏の録文を、『出土文物』、図版五二と『新博』、図版七〇(解説は一九一頁)の写真を参照して一部あらためた。

(第一節 姑師与車師前王国時期 おわり)

「トゥルファン出土唐代税布墨書銘集成」補訂

本誌第二号(一九八九年九月刊)に掲載した表題の資料集中、「M 開元九(七二一)年八月明州賀恩敬庸調布銘」について、記載されている県名は鄭県ではなく、鄧県であることを註記しましたが(註(13))、この点に関しては、既に池田温氏が指摘されていることを見落としておりました(同氏「紹介:『漢唐の織物-シルクロードの新出土品-』」〈『史学雑誌』第八四編第一号、一九七五年〉、九六頁)。ここに池田氏と読者の方々にお詫びするとともに、補訂する次第です。

(關尾)

事務局(連絡先) 〒182 東京都調布市国領町5-19-14

荒川正晴方

TEL 0424(81)4633

吐魯番出土文物研究会(The Research Society for Turfan Relics)